



## 雑感：「アメリカ研究」をめぐって

著者	田口 芳弘
雑誌名	同志社アメリカ研究
号	2
ページ	91-93
発行年	1965-03-31
権利	同志社大学アメリカ研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008661">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008661</a>

## —— 雑 感 ——

### 「アメリカ研究」をめぐって

田 口 芳 弘

明日の時代の文学のあるべき姿は、文芸評論家ではなく、作家のみが、みずからの作品によって顕示することができるように、アメリカ研究もまた、実際に研究に従事している者のみが、当面する困難を克服しつつ将来の研究のあり方について語る資格を有するものであろう。私自身は、アメリカ研究についてまったくの門外漢であり、日本におけるアメリカ研究の歴史にも不案内、またいくつかのすぐれた報告書にも詳しくない。ただ、たまたま過去一、二年の間に幾多のアメリカ研究者に接する機会を与えられ、それらの人々の研究の場を整備する仕事に従事した者の一員として、私なりにアメリカ研究というものについて考えさせられた。これは素人のまとはずれの感想、大方のご寛容をお願いしたい。

#### アメリカ研究とはなにか

《アメリカ研究とはなにか》この問いには、明日の時代の文学のあり方をきくのと同じように、単一の正解があるという類のものではない。これは、ただ日本においてのみでなく、アメリカにおいても、いまだに open question である。あるいは、いつまでも open question であるかもしれない。それが研究というもの本来の姿でもあろう。アメリカ研究は、define することのできるものでなく、demonstrate するものであるといわれる。実際は研究を行なっていく過程になってのみ、具体的に示唆することができる。しかも、その demonstration の可能性は、おそらく研究者の数だけ存在しうるであろう。とはいうものの、研究所のような機関でグループ研究として、アメリカ研究を組織的に推進していく必要のある場合、そう呑気なことをいっているわけにはいかず、なんらかの共通の研究方向を打ち出さなければならない。

#### 共通テーマ——二つの選びかた

そこで考えつくのが、共通テーマを選ぶということである。それには二通り考えられるが、その一つは horizontal に共通テーマを設定する方法である。アメリカ研究それ自体は、一種の Area studies であるが、東西3,000マイル、南北2,000マイル、300万平方マイルにおよぶ広大な地域を、全部一時にカバーすることは不可能である。そこで小さく分割し、ニューイングランド地方、メガロポリス地帯、中西部、南部あるい

は西部というふうに一定の地域を選定して共通テーマの対象とするか、さらには特定の一都市、一村落をとりあげて総合的研究を行なうことが考えられる。

これに対して、vertical に共通テーマを限定することもできる。植民地時代から今日に至るアメリカの歴史の中で、ある特定の時代、あるいは特定の年、月、日を選んで共同に研究する方法である。第一の方法よりも比較的实现し易いとはいえ、テーマの焦点をしぼるにあたって問題がないわけではない。共同研究として専門分野を異にする学者がお互に協力しうる最大公約数的関心のある時代を選定するために、かなりの妥協を必要とする。歴史家にとって1900年以前が興味深いであろうし、文学者は第一次大戦後に注目するであろう。法律や労働問題の専門家は1930年代を、財政学者は第二次大戦以降、計量経済学者は現在さらには将来の予測に関心をもつかも知れない。極端な場合、1860年以前と1960年以降とのように関心の方向を異にすることもありうる。同志社大学アメリカ研究所では、時代区分を両大戦間にとって、一応のコンセンサスをはかった。こうした地域区分、時代区分はいかようにも取ることができる。この領域での研究が比較的若い発展段階にあることに鑑みて、研究上の無駄をはぶき、能率を向上させるために、各地方の、あるいは各個の研究機関において研究部門の分担を行い、分業化とその全国的な組織化が将来考えられねばならないであろう。

#### マルティ・ディシプリンかインター・ディシプリンか

最近学問の分化、専門化の傾向がますます強くなる反面、学問の総合化の要求もまた日をおって高まっている。多くの新しい研究が各学問領域の boundary をおし拡げ、あるいはそれを越えたところで行われている。アメリカの大学で最も inventive な new idea はファカルティー・クラブで専門の異なる他学部の教授と食事を共にする時に生れるとよくいわれる。学問の深化、専門化は、学問領域を異にする学者のより一層の協力を必要とする。アメリカ研究もその例外ではない。ところで、そうした新しい研究領域の開発を組織化する場合、エール大学その他がアメリカ研究センターで行っているように、各教授、研究者はそれぞれの専門の学部に所属しつつ、教育と研究をセンターで行う行き方と、ハーバード大学が Department of Social Relations の創設を行ったように、関連する学問領域を統合して、まったく新しい学部をつくり、そこでより有機的協同研究を行う行き方とがある。両者ともに一長一短があるが、どちらかといえば、前者は multi-disciplinary studies であり、後者は inter-disciplinary studies であり、

ciplinary studies の色彩が強くなる。時代の要請もあって社会科学の領域でこうした傾向に基く新学部の創設が各大学で次第に行われつつあるが、古い学問的伝統にとらわれた様々の掣肘があり、新しい discipline が確定していないこともあって、仲々に思いきった飛躍が困難のようである。

### アメリカ研究とヨーロッパ研究

アメリカ研究に従事している人々から、「アメリカ」研究を標榜すると損をするという言葉をしきることがままある。日本の知識人の意識の中にひそんでいる抜きがたい偏見をいいあてた言葉である。「アメリカ」研究が、「イギリス」研究、「フランス」研究、「ドイツ研究」に比べて、一段低いものといわぬまでも、同等に取扱うべきものでないかのような感覚がないであろうか。明治以来ヨーロッパから輸入され蓄積された伝統的研究態度への尊重と執着、アメリカ流の極端に合理主義的な新しい研究態度への批判と反感に無関係ではなからう。それがさらに、アメリカ文明に対するヨーロッパ人的基準で測られた偏見と侮蔑と羨望の輸入を伴わなければ幸いである。(もっともヨーロッパ人のアメリカに対する complex とアメリカ人のヨーロッパに対していただく complex、これはアメリカ研究の興味あるテーマの一つではある。) アメリカ研究も、イギリス研究、フランス研究、ドイツ研究、ソビエト研究も、中国研究、東南アジア研究、中近東研究、アフリカの研究なども、広い意味では総合的で一種の地域研究である。その研究の活潑さの度合は、地理的距離によってきまるものではなく、文化の親疎度、伝統の類似度、日常的水準における生活様式の遠近度と文化交流の量とひん度等々によって左右される。ただわが国の場合、近隣諸国よりヨーロッパ、アメリカについての研究の盛んなのは、文化交流にさいし、outflow より inflow に影響されるところが大なるせいでもあろうか。

### アメリカの日本研究と日本のアメリカ研究

日本におけるアメリカ研究が論ぜられる際に、アメリカにおけるアメリカ研究が引き合いに出されることがしばしばある。しかし、これは果して当をえているであろうか、日本における日本研究を考えてみよう。日本のある時期、たとえば徳川時代、明治維新、あるいは日本の近代化について、文学者、歴史学者、政治学者、社会学者、経済学者等々が共同研究をする場合、そこには日本人として日本を総合的によりよく知ろうという問題意識があるであろう。それに対して、文化、伝統を異にするアメリカ人の学者の日本研究には、異

った問題意識をもってわれわれの気のつかぬ興味ある示唆を与える場合が少くない。日本のアメリカ研究もまた、日本人のもつ問題意識によってアメリカの思想になんらかの積極的貢献をする方向に進めたいものである。したがって、われわれが日本におけるアメリカ研究の counterpart として比較し、参考に資すべきはアメリカのアメリカ研究ではなくて、アメリカの日本研究ではなからうか。アメリカにおける日本研究は周知のように、三つの段階を経て、今日に至っているといわれている。Serge Elisseeff によって代表される戦前のパイオニアの第一期。戦時中 language officer として訓練を受けた日本語の能力を生かし、占領後も日本に滞在して親日家となり、日本研究に入っていた多数の日本研究家を輩出した戦後の第二期。この期は日本研究をする専門政治学者であり社学会者であり文学者であるというより、日本の専門家 Japanologist の全盛期でもあった。しかし専門的訓練 (discipline) に乏しかった日本専門家は、戦後十年を経て次の世代にとって代られることになった。第三期である。専門の disciplinary training を受けた新進の学者が、日本語をマスターし日本問題に取り組むようになった。歴史の Albert Craig 経済学の Henry Rosorsky などがそれである。

日本におけるアメリカ研究も多少の差こそあれ似たような段階を経過して今日に至ったといえないだろうか。高木八尺教授を中心とした戦前の第一期。終戦後米軍占領下のアメリカ万能時代、通弁的アメリカ屋の横行した第二期。そして本格的な disciplinary studies のはじまった第三期。そのことは言葉や事実の知識よりも discipline の重要さが認識されてきたことで示されている。inter-disciplinary approach か multi-disciplinary approach かの論議はさておくとして、他国の文化を研究する場合、日本のアメリカ研究でも、アメリカの日本研究でも、まず出くわすのは言語障壁 language barrier と文化についての基礎的知識の欠除である。日本のことについてアメリカの学者よりわれわれは一通り政治、経済、歴史、地理、文学、宗教その他必要最小限の基礎知識をもっていて、その上でそれぞれの専門的研究が行われる。ところがアメリカについては、専門的知識とそれ以外の基礎知識のギャップがあまりにも大きい。それが研究の Perspective の妨げともなりかねない。こうした欠陥を除いてアメリカ研究者を育成するのに、東京大学の教養学部方式はたしかにきわめて有効であった。アメリカ文明についてのがい博な基礎知識を与えた後で専門の学問的訓練

をする行き方である。しかし現状では、逆の方法もまた必要ではなからうか。政治学、社会学、経済学等、専門の学問的訓練を受けた後に、学問的興味その他からアメリカ文化の研究に関心をもった人々に、より広汎な基礎的知識と一層の関心を与える方法である。近代理論に関係する経済学者に関する限り、アメリカの経済理論、経済制度を研究し、アメリカに留学した人も多く、アメリカ文化全般についての関心の深い人々も少なくない。こうした人々は直接はいわゆる「アメリカ研究」に関係せず、また積極的関心を示さなくとも、アメリカ研究の貴重な予備軍である。広義のアメリカ研究のためにこの潜在的アメリカ研究者を組織化することはきわめて重要な仕事であろう。

#### アメリカ研究のCOMMON ROOM

アメリカでは大学のファカルティー・クラブのテー

ブルが、アイディアの生誕の場所だといった。日本の学会はあまりにもストイックでもすれば真剣勝負のやりとりになりがちである。同志社大学のアメリカ研究所は、大学、学部、専門領域を異にする研究者の知的交流の場として利用されると共に、至らざる設備ではあるが Common Room として、なごやかな雰囲気の下に情的交流の場としており、アメリカ研究の発展にささやかな一役をはたすことができればと願うものである。洞察と英智と緻密さと努力の上に積み重ねられて行くアメリカ研究の成果に畏敬の念を表しつつ、研究所の裏窓を通じて感じた雑感、重ねて大方のアメリカ研究者のご寛容を願いたい。

(同志社大学経済学部教授)  
(同志社大学アメリカ研究所実行委員)

×

×

×

×

×

研

究

所

報

前号に報告したアメリカ研究所主催の公開の研究会、講演会は、その後も引続いて行われ、1965年2月までに下記の会合をもった。E. N. Saveth 教授を招いて行われた「アメリカ研究講座」は連続8回行われ、毎回異ったテーマを論じてアメリカの諸問題を広く取扱った。

《研究会》 63.9.26

「アメリカの農業政策の基調」

柏 博 (同志社大学経済学部講師)

《研究会》 63.10.24

「初期のアメリカ詩」

秋山 健 (同志社大学文学部講師)

《American Studies Institute: 公開講演》 63.12.13

「アメリカの作家と政治: 1920—40年」

Norman H. Pearson (Professor, Yale University)

《American Studies Institute: 討論》 63.12.14

「1920年代、30年代のアメリカ」

「アメリカ研究の諸問題」

Norman H. Pearson

《研究会》 64.1.16

「日米両国におけるアメリカ研究」

Seymour Lutzky (Professor, Univ. of Hawaii)

《研究会》 64.3.12

「アメリカ史の再解釈—南部史を中心として」

C. Vann Woodward (Professor, Yale University)

《研究会》 64.4.11

「アメリカ史研究について」

Merrill Jensen (Professor, Univ. of Wisconsin)

《公開講演会》 64.4.24

「ナショナリズムの歴史」

Boyd C. Shafer (Professor, Macalester College)

《討論会》 64.4.24

「アメリカにおける歴史研究活動の現状」

Boyd C. Shafer

《講演》 64.6.3

「ピューリタニズム解釈の新傾向」

John D. Eusden (Professor, Williams College)

《講演》 64.10.10.

「ニュー・ディールの諸問題」

Morrison Handsaker (Professor, Lafayette College)

《アメリカ研究講座 [アメリカ社会思想

の諸問題] 1》 64.10.20

「19世紀後期の諸相: 実業家—Andrew Carnegie」

Edward N. Saveth (Professor, New School for

Social Research)

《アメリカ研究講座 2》 64.11.10

「19世紀後期の諸相: 官僚—Charles Francis

Adams, Jr.」 Edward N. Saveth